

久保利英明の グローバル彷徨



イラスト・題字：長峯亜里

最終回

イルカとアザラシと砂丘と星空と ——野獣のバーベキューの国ナミビア



世界彷徨も最終回を迎えた。拙い紀行文に1年間お付き合いいただき感謝する。

最終回は世界遺産ナミブ砂漠を有し、星空と野獣のステーキも満喫できるナミビアを取り上げる。ナミビア共和国はアフリカ大陸の大西洋岸に

位置し、日本の2.2倍の面積を有するが、人口は240万人と宮城県程度にすぎない。イギリス、ドイツ、南アなどに分断支配されたこの国は1990年に独立し、国連にも加盟した。今や政治的にも治安的にも東隣のボツワナと共に、アフリカでは最も安定している国の1つである。

月面のような幻想的な世界

私が訪れたのは2012年8月、乾季の最中であった。この日、私はドーハを夜中の1時に飛び立ち、ヨハネスブルグで飛行機を乗り継ぎ、ナミビア中部大西洋岸のウォルビスベイ空港に直行した。そこからはチャーターした運転手つき4WDでの移動となる。未舗装の砂利道を100km余り、地殻の移動によりできた「ムーンランドスケープ(日本名：月面世界)」へ。月面着陸したアポロから送

られた映像とそっくりな幻想的な景観が広がる。さらに20kmほど走って、寿命2000年を超える“生きている化石植物”「ウェルウィッチャ」と対面を果たした。和名を「奇想天外」と名づけられたこの植物は、一対のみの葉を10mも伸ばし続ける特異な形態をしている。

イルカやオットセイの群れと対面

さすがに18時間も飛行機と車に乗りずくめだったので、スワコプムントのホテルにたどり着いたときはへろへろの状態でひたすら眠りこけた。

しかし翌朝ものんびり寝ているわけにはいかない。ウォルビスベイの湾内クルーズに間に合うように6時に飛び起きて、船着き場へと急いだ。

餌付けされた巨大な雄のオットセイがクルーズ船に乗り込んでくるのに驚く。大型ペリカンが乱舞する大空の下、双胴船はイルカの群れを追いかけ、乗客は床に腹ばいになって水中のイルカを撮影する。しばらくするとオットセイの大群が現れ、10万頭が生息するというケープクロスのコロニーのすぐそばまで船は寄っていく。ナミビア沖には幅、数100kmにわたるベンゲラ海流という強力な寒流が流れている。そのためアフリカの南回帰線上とはいうものの、乗客は長袖シャツを着て震えている。この海流域では南東の風が優勢で表層水は沖合に押しやられ、寒流だから水温が